

Myツール

日本工具工業会 会報



『島根県に進出して 気付かされた事』

監事 大見 満宏

弊社は平成24年5月、島根県益田市に、国内では初めて本社のある愛知県以外に進出し、工場を稼働開始して今年で3年目を迎えた。



島根益田工場社屋

進出の最終決定は平成22年12月の役員会で決定しているが、私自身その3カ月前には内心決めていた。その当時1ドル=85円 日経平均=8,300円、民主党政権の『コンクリートから人へ』『事業仕分け』等の緊縮政策が続く、工場運営においても国内生産には魅力を感じられない時であった。そして、翌年の平成23年3月11日には東日本大震災が発生し、日本国内経済にも大きな影響を及ぼしたが、逆に円が急騰し70円台となり、G7協調介入や日銀が為替市場へ覆面介入したにも関わらず、更に円が高騰する異常事態が続いていた。

このような超円高状況が進む中、海外工場では無く過疎化が進む国内地方への工場進出を決定した当時は、金融機関や取引先からも『今更どうして国内進出ですか?』『何か島根県に古いご縁でもおありですか?』『どうして海外進出ではないのですか?』等、数多くの質問・疑問?を戴いた。

結果論ですが、あれから丸三年が経過し、当時の判断は当社にとって非常に有益な物となり、ブームや景気に左右されるような経営判断は短期的な利益については良いが、中長期に渡り安定した利益をコンスタントに生み続ける事が工場運営において最善と考える私にとって、流行に左右されない経営判断が最も重要であると改めて感じた。

島根県益田市を簡単にご紹介すると、人口48,379人(2014年8月1日現在)、面積は733.24平方キロメートル(東京23区が622.99平方キロメートルなので、それよりも大きな面積)である。

山陰地方ではあるが、山口県の県境に位置し沿岸部は殆ど積雪が無く、気候的にも温暖な北九州気候と似ている。よって、農産物もブドウ、メロン、梨、ゆず、山葵が名産であり、日本一の清流「高津川」も市内を流れ、アユが数多く遡上する。漁港も6つ保有し、漁業も盛んである。しかし、人口減少については日本の他の地方と同じ問題を抱えており、現在の山本市長(45歳)が今年2月に人口拡大課を新設し、2020年に5万500人を目指している。

進出の決定から今日まで、島根県庁職員、益田市職員そして地元企業・進出企業経営者の方々と数多くお会いする機会があったが、私が一番印象に残っているのは、小林副知事が話された『我々は地方行政の中小企業なのです。太平洋側の大都市、大企業行政と同じ政策・運営・PRではとても敵いません、よって、ありとあらゆる知恵を使って運営する必要があります。』との言葉だ。まさに、我々中小企業と同じ目線である。この姿勢は島根県の各市町村行政にも表れている。

一つの事例ではあるが、毎年島根県庁が発行する『島根県自虐カレンダー』は今年で発行5年目になり(近年は大人気で直ぐに売り切れてしまう状況が続いている)、内容は過激で、行政が正直ここまで地元の自虐ネタを使う事は勇気がある事である。

敢えて自らの弱みをさらけ出す事は、一般企業であっても中々プライドが邪魔して出来ない事である。しかし、負の部分を理解しているからこそ、正しい判断や考えが出来、場合によっては負の部分の逆を正に出来る方法を示している。

ここ数年、島根県の皆様には大変勉強させてもらっている。自社の強み弱みは何か?事業の本質とは何か?企業は何を守り続けるのか?正しい判断とは何か?

工業会会員の皆様も機会があれば是非島根県、そして弊社工場にもお越し戴けたらと思っております。意外な何かを発見し、気付かされる事があるかもしれません。

(大見工業(株) 代表取締役社長)



米国工作機械見本市 IMTS2014に出展して

Nachi America Inc. (株式会社 不二越) 岩本 謙治

私は米国の工作機械見本市IMTSには、2002年に初めて参加をさせて頂いた。その後2006年の出展の翌年に帰任して、今年に入って2回目の米国赴任を命ぜられ、実に8年ぶりの参加となった。出展社数は2千社を超え、総入場者数は114千人で前回比14%増という結果が報告され、各社のブースで伺った感想とを総じて大盛況で有ったとまず初めに報告したい。

思い起こせば、2002年当時は、工作機械メーカーが出展する巨大なSouthフロアには、米国のCincinnati社やHaas社等が入口真正面のフロアを占め、マシンを巨大な航空機用部品を実際に削りながら展示しているシーンが、自分にとってのアメリカらしさの一つの象徴であり今でも脳裏に焼き付いている。それが今日では、日系工作機械メーカーが最前列はもちろん、その更に奥を占めるまでを陣取り、正に180°形勢が逆転していた。エネルギー事情の改善に伴い成長が期待される北米、および自動車関連工場の進出が著しいメキシコ市場での成長を求める各社の意気込みが肌で感じられると共に、直接そのような生の声も聞かれた。今回初めて見学をしたというある銀行の女性が、「日本人にとっての誇りです。」と評されていたのを見本市が終わった今でも印象に残っている。

我ら切削工具メーカーは、2008年以降新たに新築されたWestフロアで軒を広げている。以前の地下フロアと違って天井が高くなったせいか、各社規格内の空間を最大限に活用したブースデザインを展開していた。よって当然の如く、当社のように奥に配置されたブースは、いくら看板を大きく掲げても正直近くへ寄るまで姿が見えない。当社ブースへのVisitorには、よくぞここまで辿り着いて下さったと、正直、今も心からお礼を言いたい。中でも同じ業界の方の意見とも一致して圧巻だったのはSandvik社。白を基調に、最小限の商品展示と、実演用のマシンを中央に配置して集客スペースを最大限に確保するデザインは大胆そのものであった。多様な価値観が存在する米国社会では、このような斬新な方法も受容される事を学んだ。少し展示内容に触れると、超硬工具についてはソリッド工具からインサート・刃先交換式への転換が更に進み、ドリル・エンドミルはもちろん、歯車加工用のフライスやホブカッターにまでも及んでいる。展示を見る限りでは、明らかに、メーカーとその展示工具数が共に以前よりも増えており、各社懸命に新技術をユーザに訴え掛けている様子が伺えた。一方、タップについては、メーカーがこんなにも多く有ったのか?と思わせないばかりに各社現在の勢力構図を変えたいかの如く、主力メーカーを中心に、精力的に出展していた。

さて、私の探していたアメリカらしさは上記以外にも有った。それは、近年急激に技術が進展し、実用化が進んでいる3Dプリンタ技術である。今回のIMTSのメインイベントは、何と3Dプリンタで製造した部品で実際に車を公開の場で組み立てて、しかもそれを最後に走らせてしまおうというものである。実際の走行シーンを(本寄稿の責任を感じて)撮影したのでご覧頂きたい。近くに寄ってみると、積層技術によって作り上げられた様子が分かります。

思う。何か大きい事を成し遂げたいという企業家の発想と、それに夢を馳せる投資家とがうまくバランスするアメリカ社会ならではの産物と私には受け取れ、同写真の一コマは、真のアメリカを垣間見た瞬間でも有る。

IMTS、別名シカゴショーでの楽しみは、これまでも諸先輩方が報告されているように、やはりシカゴダウンタウンのレストランでの食事であることには相違ない。飲食の味はもちろん、店内のデザイン、プロの接客術、そして顧客との会食でも何故かリラックスさせられる雰囲気には格別のものが有る。私も久々のシカゴの夜を懐かしみそして楽しむべく、日替わりでいくつかのレストランを巡った。その中でダウンタウンにあるラーメン店にも行った。赴任前に、New YorkのManhattanやLos Angelesでラーメンが流行っているというテレビ番組の事を思い出し、場所は異なるが空腹感と好奇心とが混同しながら同僚とチャレンジをした。店内に入ると、平日の夜であるにも関わらず、ローカルの顧客でほとんどの席が埋まる盛況振りであった。女性店員が早速愛想良く注文を聞きに来た。私は、注文の前に気になっていた事をまず質問した。「食べる時にズルズルと音(slurping noise)を出してもいいの?」と聞くと、明るく「もちろん。全く問題ないですよ!」と、待っていましたとばかりの即答ぶり。従来のマナー違反も、店内では日本の慣習が尊重されているようで正直安心した。それぞれ醤油と豚骨ラーメンとを注文した。多少時間が掛かりやっと出てきたラーメンにそれぞれ口を付けるや否や出てきた言葉は揃って「ぬるい!」。麺は伸びてもいないので、おそらく米人の好みの温度に合わせているのだろうとお互いを納得させた。完食こそしたが、多分、次に来ることは無いだろうとの意見で一致した。

「日本人にとっては不味いラーメン」で終わるのは常だが、見方を変えれば、お客様のTasteに合わせていかに自分をAdjustできるかがBusinessの上ではとても大切であるという事を、扱う商材は違えど、繁盛する店内を見つめながら改めて教えられた気がした。

最後に、今回のIMTSも、伝統を守りつつも常に斬新さにチャレンジする、アメリカらしい「発想とスケールの壮大さ」に圧倒させられた見本市であったと締めくくりたい。なお、このような寄稿は初めての経験であり、ご機会を下さった日本工具工業会の日下部専務理事ほか皆様に感謝致しますと共に乱筆をお詫び申し上げます。

(ナチアメリカ工具営業部ラウンドツールGr長)



超硬工具協会との統合検討の経過

日本工具工業会事務局

Myツール前号(No.114号)で、超硬工具協会との統合検討開始についてお知らせしましたが、その後、両団体の正副理事長合同会議、統合推進委員会により議論を継続しています。会員の皆様に検討結果を出来るだけご理解頂けるよう、Myツールでその経過をお知らせしていきたいと思っています。なお、本件の内容は当工業会の理事会あるいは総会で決議されておりません。現段階での案ということで御理解願います。

9月末現在で、正副理事長合同会議は3回開催し、統合推進委員会は、4回の議論を重ねてきました。統合推進委員会が、実務的な課題の統合案をまとめ、正副理事長合同会議に上程し、統合案を決めていく手順をとっています。両団体とも66年余りの歴史が有る団体で、同じ切削工具を製造しているメーカーの団体と言っても、それぞれ独自の運営をしてきました。一言で統合といっても色々な課題があり、そう簡単に意見が一致することはありません。

そのような状況の下、正副理事長合同会議、統合推進委員会では、下記のような事項を議論してきました。統合案の内容については、次号でお知らせ出来るものはお知らせしたいと思います。

統合に向けての検討事項

- ①団体名称、②英文名、③英文略称、④ロゴマーク等、
- ⑤定款、⑥事業、⑦組織、⑧理事会、⑨広報、⑩人事、
- ⑪事務所統合、⑫会費、⑬会員資格、⑭表彰制度

また、統合までに両団体の活動がコンプライアンス上、問題がないか専門家に検証して貰う事が決まりました。更に、両団体初めての合同行事として、来年の新年賀詞交歓会は、平成27年1月8日(木)に合同開催とし、お互いに相手団体のメンバーを少しでも知ることが出来るような企画も考えています。統合時期については、来年の6月を目途として検討を継続しています。

○今後のスケジュール

- 10月30日 平成26年度第2回理事会
 - ・統合の検討案の審議、
 - ・環境賞受賞会社の決定

- 11月28日 秋季合同部会・環境賞表彰式
 - ・統合検討案の理事会での審議事項の報告
 - ・部会、委員会報告
 - ・環境賞の表彰式、受賞会社のプレゼンテーション
- 1月 8日 合同新年賀詞交歓会
 - ・丸の内銀行倶楽部にて開催
- 3月頃 事務所の統合
 - ・先ずは共同事務所として集約する(JR秋葉原駅近辺に決定)
 - ・統合が可決されれば新団体の事務所とし、否決されればそれぞれ元の団体の共同事務所とする予定
- 3月か4月頃 臨時総会
 - ・統合検討結果に基づき、統合の賛否を投票で決議
 - ・統合が可決されれば、6月に解散総会、設立総会へ(下記)
 - ・否決されれば、それぞれ元の団体で活動を継続
- 6月 設立総会等の開催(6月3日が最有力候補、開催場所は東京のホテルを想定)
 - ・統合が可決されれば下記の総会等の手続きを経て新団体が誕生
 - ・それぞれの団体で理事会、総会を開催⇒解散の手続き
 - ・設立総会、披露パーティーを開催

統合推進委員会のメンバーは、業務多忙の中、かなりの頻度で会議に出席頂いています。今年の総会あるいは各部会、委員会で頂いたご意見をしっかり統合に反映できるよう頑張っています。今後も、機会ある毎に経過をご報告して参ります。会員の皆様も気になる事がありましたら、事務局までお知らせください。統合が全ての会員の皆様にとってメリットがあるように議論を重ねたいと思っています。

株式会社 スターエム

〒673-0444 兵庫県三木市別所町東這田 722-47(三木工場公園内)
TEL 0794-82-3232 FAX 0794-82-4200
URL <http://www.starinfo.com>

会社紹介と工場 PR



新社屋



高野山中門用柱の穴あけ

当社は、山陽自動車道の三木・小野インターから南へ約6km、三木工場公園の一角にあります。1923年10月に創業、1950年に(株)小林ギムネ製作所に社名変更し、その後時代と共に成長して来ました。そして、2009年に小林ギムネグループの4社を統合して現在の株式会社スターエムに社名変更した訳ですが、今年で91年目という歴史を持つ会社です。一方、海外でも2003年に現地法人スターエム・インターナショナル(シカゴ)を設立しています。

ギムネとは木に穴をあけるドリルのことで、当社は市内を流れる美囊川(みのうがわ)の自然豊かなこの地域で、暮らしに欠かすことの出来ない木材の「穴あけ工具」の製造販売を行って来ましたが、今では木工用だけでなく、カーボン・樹脂・カラーベスト・サイディング用の製品もオーダーメイドで製作しています。大切なものはしっかりと受け継ぎ・残しつつ、100周年を目指して社員一同積極的に新しいことにも挑戦しています。

ここで、「こんなところでも(株)スターエムが……」という例を三つご紹介させていただきます。一つ目ですが、現在高野山では2015年の「高野山開創1200年記念大法会」の記念事業として中門の再建作業が進んでいます。この中門に使用される奈良県産の樹齢300年のヒノキ柱の中心に、直径90mmの貫通穴を開けるのに(株)スター



生田神社
(郷土の発明功労者碑)

桑谷 玄 称 特殊ステンレス鋼の発明
黒田 七 郎 潜水調査船「しんかい」の
児玉 芳 男 紡績及燃焼用リングの
小林 滝 造 蛍光灯におけるダブルス
小林 元 二 木工用螺旋錐の発明
坂田 元 記 セメント分散剤製造法の発
酒井 佐 敏 鍛鋼焼入ロールの発明
塩山 仁 片面溶接用裏当材の発明
笹井 次 郎 多彩色塗料の発明
笹山 武 彦 油圧式遠隔操作装置の発明
佐々木 信 勝 コークス炉の集塵方法の発明

発明功労者碑部分拡大
(小林元二)

エムの穴あけ技術が活かされています。二つ目は、皆様がよくご存じの食材”しいたけ”の栽培についてご紹介いたします。しいたけの栽培には「原木栽培」と「菌床栽培」がありますが、当社の”しいたけ用ドリル”が「原木栽培」に使われています。原木に穴をあけてそこにしいたけの菌を埋め込み、栽培されるのです。三つ目ですが、神戸の生田神社に「発明功労者」の碑があり、当社創業者の小林元二の名が刻まれています。戦前に世界で初めて木工ドリルの製作を機械化し、量産化した功績を「木工用螺旋錐の発明」として称えられています。

その他、社長から新入社員まで全員がお互いを「○○さん」と呼び合っている事、事務所や工場に40インチのモニターが設置されており、毎日社長のメッセージが数種類、繰り返し流されている事、更に冬季には木屑等で製造されたペレットを燃料とするペレットストーブが木のぬくもりを感じられる環境づくりのお手伝いをしている事が挙げられます。

ご当地紹介

当社のある三木市は人口81,000人の自然に恵まれた町で、特に「金物のまち」として昔から全国的に有名です。毎年11月には三木市の一大イベントとして「三木金物まつり」が開催され、昨年度は全国から16万5,000人の参加者がありました。三木金物の展示・即売会や昔ながらのふいご*1を使った古式ゆかしい鍛錬技術の実演があり、鍛冶の伝統技術を現代に伝えています。

中でも、「金物鷲」の展示は特に参加者の目を引きまします。現在の金物鷲は3代目で、東京・大阪のDIYショーや、ニューヨーク・ドイツへの展示も経験しています。「金物鷲」は、鋼鉄の枠に藁を巻きつけた本体に、1本1本刃物を突き刺して組み立てられており、熟練・安全・費用等の面で毎年の組立は大変ですが、その魅力や鷲の如く世界に羽ばたく三木金物のシンボルとしての存在は不滅です。



金物鷲



古典的木製手動式ふいご

*1 ふいご(鞴)：金属の加工・精錬などで高温が必要となる場合に、気密な空間の体積を変化させることにより空気の流れを生み出す器具で、燃焼を促進する目的で使われる。



憧れの山を眺めて思う

環境委員長 松岡 信一

学生時代は山への特別な興味はありませんでした。就職が決まり、生まれ育った九州から春の富山に到着。その時の立山連峰の姿には衝撃を受けました。

雪を頂いた3000m級の山々に圧倒され、日本にこんな山があるのだと感動したしだいです。

自然豊かな富山で縦走、岩登り、山スキー、冬山と色々な登山にチャレンジしました。

どれも中途半端に終わりましたが、それでも山歩きは今も少しだけ続けているので、この紙面を借りて富山の山を紹介させていただきます。

入社後のある日、何故か会社の山岳会から誘いの声が掛かり気軽に入会。11月入会で活動は来年の夏からかと思っておりましたが、翌年1月に標高2000mの冬山へいきなり入門登山。カンジキを履いての雪上歩行、雪上テント生活など、どれを取っても新鮮でしたが、登山初心者の自分には、前に付いて行くのが精一杯で、頂上の様子などは全く覚えていません。

その後の春からは、この山岳会が拘っている地元の山『劔岳』に、のめり込んでいく事になります。

ところで富山平野から見える雄大な立山連峰ですが、実は立山と名が付く山(独立峰)はありません。

平野から眺めて右手(南側)に『富士ノ折立 2999m』、『大汝山 3015m』、『雄山 3003m』が聳えており、これらの総称が立山です。シーズン中は標高2450mの室堂まで高原バスで行くことができるので、雄山の頂上にある祠は、多くの参拝者で賑っています。

連峰の中心で圧倒的な存在感を見せるのが『劔岳 2999m』です。見た目の山容も劔ですが、頂上に登るには、尖った岩峰を登攀する必要があります、簡単に人を受容れない「試練と憧れ」の山です。

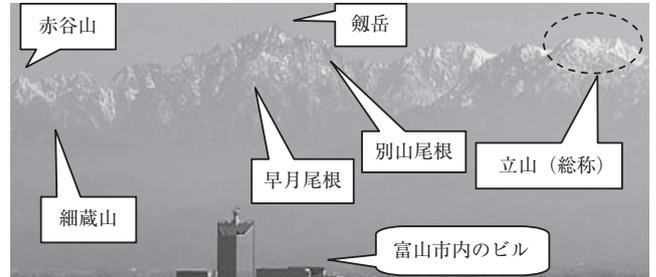
ここからは、前述した山岳会の諸先輩と入り浸った『劔岳』について紹介します。

劔(山仲間での呼名)へのルートは数十はあります。

映画化された新田次郎原作の「劔岳 点の記」では苦難の末、(近代での)劔初登頂を果たします。この時に開拓した長次郎ルートもその一つです。

因みに、この登頂時に発見された錫杖頭と鉄剣は平安時代初期の物と鑑定されており、登山装備も無い時代に登頂した修験者の精神力と体力には驚愕します。

現在の一般登山ルートは室堂側からの別山尾根ルートと標高800mの馬場島から登る早月尾根ルートの2つです。一般ルートと言えども岩峰を鎖や梯子を頼りに登攀する場面も多く、まさに試練の山です。



【富山平野からの立山連峰】



【細蔵山からの劔岳】

【早月尾根 登山口】

一方、山岳会是一般ルートでは無い尾根筋、谷筋、岩場がメインとなります。毎月「劔」に登りますがルートは毎回変わります。同じルートでも季節を変える事で、まったく別ルートにもなり、飽きる事無く登っていました。

30代半ばに勤務地が変わり、登山から遠ざかりましたが富山に戻った昨年からは日帰りの山歩きを再開。今回は『劔の眺めを楽しむ山登り』がテーマです。

頂上に登ったら、その雄姿が眺められない事に、やっと気付いたからです。(体力低下も一因ですが)

日帰り圏内で、劔が見える山を探しては登っています。馬場島周辺の細蔵山、赤谷山、中山などが穴場で、普段は見られない劔の山容を楽しめます。

何時かは、あの山に登りたいとの思いから登山を始めましたが、周辺の小高い山から憧れの山を眺めて楽しむのも良いもので、新しい劔を発見できます。

生活や仕事でも問題の事象から二三歩下がって全体像を眺める事が大切だと、少し判った様な気がします。

蛇足ですが、2015年春の北陸新幹線開業で、富山へのアクセスも良くなります。立山・黒部アルペンルートで前述の立山連峰を真近に見ることができます。

心のリフレッシュに是非どうぞ。

(株)不二越 工具事業部 生産技術部長



日本工具工業会稗史（第四回）

【タップ戦争】

前述のドリル戦争の前に、タップ業界でも激しい争いがありました。原材料に炭素工具鋼が使われていた時代のタップねじ部加工は、ねじ切り旋盤による切削仕上げが中心でした。その後、合金工具鋼製タップが主流となるにつれて細物タップは、ねじ転造盤による転造仕上げが一般化したため、一挙に生産量が増大し供給過剰となり安値競争によるシェア争いが激化しました。しかしタップ業界はドリルのような政治力も無いため、話し合いも中々纏まりませんでした。このまま過当競争が続くと共倒れしかねないという危惧から、タップ専門メーカー数社の社長が一堂に会し、各社の営業部長も同席して事態収拾の協議をしましたが、価格是正の話し合いは纏まらず、価格が乱れるのは設定価格が高すぎるからで、各社で製造原価を出し合って一番低い原価から売値を算出すれば値崩れはなくなる筈という乱暴な結論に達しました。その結果、価格の維持どころか更なる値下げをする事態となり、大手メーカーは傘下の代理店に対して数千万円を超える当時としては巨額な在庫補償を余儀なくされました。これに懲りてその後、タップ社長会は二度と開かれることはありませんでした。

しばらくして、喧嘩ばかりしていても始まらないということからタップ各社の営業部長が箱根の温泉宿に集まって、懇親がてら過当競争回避の話し合いが試みられました。しかし具体策も纏まらず、結局は温泉に浸かって酒を飲んだだけで終わってしまいました。その後も競争は更に激化し、他社系列の販売店の在庫を自社の製品に置き換え、引取った製品を他社系列の販売店に半値で叩き売って市場価格を攪乱させるなど仁義なき戦いが続きました。

お互いに潰されまいとして、ねじ研削盤を始め各種専用研削盤を自社で開発して製造コストの削減に努力する等、原価低減に全力を挙げた結果、国際競争力がついて輸出が伸び、切削工具の中でも大和田理事長が目標とした輸出比率30%をいち早く達成することが出来ました。

昔、ある経営ゼミの講師から次のような寓話を聞いたことがあります。

『……ミルクの一杯入ったバケツに二匹のネズミが落ちました。一匹のネズミは冷静に周囲を見回し、壁が高く逃げられないと観念し、そのまま溺れ死んでいきました。二匹目のネズミは何としても助かりたい一心で無我夢中で泳ぎ回ったところ、ミルクが掻き回されてバターに変わり、それを足場にして外へ逃げる事が出来ました。……』

つまり一所懸命、死に物狂いで経営に努力すればやがて道が開けるといふ譬え話でした。タップ業界もどう

やら二匹目のネズミ状態で競争したようです。（もっとも一匹目のネズミの例も若干ありましたが……）

【初めての中国輸出】

昭和42年（1967）特殊鋼メーカー日立金属の土器屋常務が団長となって鉄鋼輸出の商談で訪中した際、中国側からタップ・ダイスの輸入について打診がありました。帰国後、土器屋常務から工業会へ話が持ち込まれ早速タップ各社が集まって検討が開始されました。当時は日中間で輸出入のルートは無く、大手貿易商社も取扱いが出来ず、唯一の輸出方法はLT貿易（中国側：寥承志、日本側：高碓達之助、両氏のイニシアルを採って命名された覚書貿易）に限られていたため当該輸業務は中国側が指定した友好商社の西日本貿易が担当することになりました。

引き合いがかなり大量だったので各社の営業部長で交渉団を結成し中国に乗り込んで商談をまとめることになりました。不況の最中、社内の期待を背負った営業部長達は張り切って出発しましたが、中国側は連日のように中華料理のご馳走攻めや観劇会、名所見物などを催し、なかなか商談に入ろうとしませんでした。代表団がイライラし始めたところを見計らってようやく商談が開始されましたが大量の発注をちらつかせ乍らトコトン値切りにかかりました。再三にわたる交渉で大幅に値切られた上、出てきた発注量は思いのほか少なく、代表団もあまりのひどさに交渉を打ち切り、ひとまず帰国することにして空港に向かいました。そこへ相手側が追いかけてきて再交渉を迫ったので、もともと注文の欲しい日本側は再び商談の席に着きましたが、結局注分量はそこそこ確保したもの、驚くほどの安値で受注する羽目になりました。

中国輸出は以後数年に亘って継続されましたが、発注内容の中には首を傾げるものもありました。例えばY社が受注したM16×2、ねじ切り丸ダイス（50ミリ外径）の数量は何と10万個で、内外を問わずダイス一寸法の受注量としては前代未聞のことでした。いくら国家統制下での一括発注とはいえ理解に苦しむ量で何とか納期通りに納めたものの本当に使われたのかどうか不明です。

しかしながらこの中国輸出の経験が契機となってタップの輸出力が更に強化されたことは事実です。

【グループ化】

昭和43年（1968）に実施された機振法（機械工業振興臨時措置法）の第三次見直しに際し、資本自由化対策の一環として通産省指導の下で、業界体制整備を行うことになりました。いわゆる“グループ化”で、次

のような検討が行われました。

- ①ドリルについてはいくつかのグループを結成し、生産品種の調整を行う。
- ②タップ・ダイスについては2～3程度のグループを結成し、グループ内で生産品種の調整を行う。
- ③リーマ・ミーリングカッタ・ギアカッタについては、生産品種の制限に関する共同行為を行う。
- ④バイトについては二つ程度のグループを結成し、大手2社からの半製品の供給を受け、集中生産を行う。
“グループ化”の実際の動きは次の通りでした。(以下敬称略)

ドリル業界ではドリル戦争以後、不二越、神戸製鋼にDMC(中小9社で結成された日本ドリル生産者連合)＜理研・宇都宮・魚津・日本小径・金森・斉藤・園池・米田・大華＞を加えた三つのグループ分けが存在していましたが、後にDMCは大華と日本小径が独自路線を選択したため、RUSグループ(理研・宇都宮・斉藤・園池)とKUYグループ(金森・魚津・米田)の二グループに再編されました。

フライス・リーマ関係では第1グループ5社(大華・宇都宮・理研・三興・園池)とセントラルグループ4社(不二越・大和・大見・東亜)、標準品グループ6社(日本工具・岡崎・三協・第一・フクダ・栄工舎)の3グループに分れ、神戸製鋼と恵美須屋は業務提携の形で決着しました。

タップは日本精密・田野井・大岡・彌満和の4社がグループ化し、オーエスジー・早坂の2社でグループを結成しましたが両グループともこれといった成果を挙げるまでには至りませんでした。一方関西グループの9社(関西精密・酒井精工・イシハシ・野村・東和精密・福田精工・東洋タップ・興産産業・松阪鉄工)は原材料の共同購入・生産設備の共有などで、ある程度の効果を発揮することができました。

バイトは大手2社(日立金属・日本高周波)が高速度鋼製チップの集中生産を行いました。

以上品種別に各グループで生産分野の調整(寸法別専門生産)、原材料の共同購入、半製品の交換、共同熱処理、技術交流による品質の統一、等々が打ち合わされました。しかし鳴り物入りで計画された業界の体制整備も具体論になると総論賛成、各論反対でなかなか思うように進まず、時限立法だった機振法が期限の到来＜昭和46年(1971)3月末＞を迎えて廃止されたこともあって、グループ化構想は殆ど立ち消え状態になってしまいました。

【石油ショック以降】

昭和48年(1973)、第4次中東戦争に伴い、OPEC(アラブ石油輸出国機構)が石油輸出価格を実に4倍に引き上げたため世界経済は大混乱に陥りました。ドルショックからようやく立ち直りかけたわが国経済も直撃され、石油価格が最高で5倍以上に暴騰したため諸物価は高騰し、狂乱インフレ時代の幕開けとなりまし

た。街頭からネオンが消え、物不足から国民は一斉に買占めに走り、スーパーからトイレットペーパーが姿を消し大混乱に陥りました。(タバコを一年分買占めた人は、最後はカビが生えて大損をしたとか)

政府は物価高騰を抑制するため躍起となり、公定歩合は五度に亘って、実に9%まで引き上げられました。我々の業界も電力供給が制限され原材料価格も品薄で高騰したため、操短を余儀なくされ生産は減少し、納期遅れや供給力不足が深刻化した事から、ユーザーに対し納入価格の大幅値上げを迫りました。長年に亘り大手ユーザーから毎年のように値下げを強要されてきた我々も千載一隅のチャンス到来とばかり“30%以上の値上げを受入れてもらえなければ今後工具の納入は不可能になります”と慇懃無礼に申し入れた結果、従来中々値上げを認めてもらえなかった大手ユーザーに対する価格改定が一気に実現し、溜飲を下げることが出来たのは、もっけの幸いでした。市場価格も一年に二度にわたり15%ずつ値上げされました。

一方昭和51年(1976)には未曾有の贈収賄事件と言われた“ロッキード事件”が発覚し、政、財、官界とも激震に襲われ大混乱に陥り、経済も舵取り不在の状態となり、景気の低迷が続きました。その後、輸出の急増で不況から脱出するかに見えてましたが、景気上昇は一時的なもので、昭和54年(1979)には更に第二次石油ショックに襲われ、やがて翌年には世界同時大不況となり我が国も更なる物価上昇、高金利、景気後退という三重苦に襲われました。

これら二度に渉るエネルギー暴騰を契機として、我が国も産業構造の転換を余儀なくされ、奇跡の復興と言われた戦後の高度経済成長時代も終焉を迎えることになりました。その後は経済の安定成長期と言われる時代が続きましたが、やがて昭和60年(1985)にプラザ合意による急激な円高ドル安のため輸出産業は大打撃を受け、またもや不況に逆戻りしました。政府は景気浮揚のため公定歩合の引き下げを繰り返した結果、金余り状態となり、銀行は企業に無理やり融資を強要し、その結果溢れた金は土地価格暴騰につながりバブル発生となりました。そして平成3年(1991)になるとバブル経済の崩壊が始まり、株価も土地価格も暴落を続けました。工業会では会員が本業に徹し、バブルに乗って大怪我をしたりするケースが少なかったのは幸いでした。これ以後長期間に亘りデフレ経済が定着することになりました。

現在安倍内閣ではデフレ脱却、景気浮揚に躍起となっていますが、円安の加速や消費税率の改定等が足枷となって思うように進んでいません。いずれにしても経済を人為的に上手くコントロールするのは至難の業では無いでしょうか。

(Myツール編集委員 細島 圭三)

特殊鋼工具 平成24～25年生産額実績及び26年上期実績

(単位：百万円、%)

品 目	平成24年生産実績		平成25年生産実績						平成26年生産実績	
	年間合計	前年比	1～6月合計	前年同比	7～12月合計	前年同比	年間合計	前年比	1～6月合計	前年同比
ドリル	16,813	90.5	7,901	86.6	8,941	116.3%	16,842	100.2%	9,090	115.0
ミーリングカッタ	9,348	94.5	4,209	89.9	4,451	95.4%	8,660	92.6%	4,895	116.3
ギヤカッタ	10,602	101.2	4,614	82.7	4,797	95.5%	9,411	88.8%	4,852	105.2
ブローチ	12,278	103.5	6,450	107.0	6,718	107.5%	13,168	107.2%	6,898	106.9
タップ・ダイス	32,231	103.4	13,429	81.2	13,544	86.3%	26,973	83.7%	14,807	110.3
リーマ・バイト	3,719	105.7	1,735	91.9	1,746	95.3%	3,481	93.6%	1,811	104.4
合 計	84,991	99.4	38,338	87.4	40,197	97.7%	78,535	92.4%	42,353	110.5

(出典：経済産業省機械統計)

ソリッド切削工具(ハイス+超硬) 平成24～25年生産額実績及び26年上期実績

(単位：百万円、%)

品 目	平成24年生産実績		平成25年生産実績						平成26年生産実績	
	年間合計	前年比	1～6月合計	前年同比	7～12月合計	前年同比	年間合計	前年比	1～6月合計	前年同比
ドリル	23,554	92.0	10,712	85.2	12,259	111.7%	22,971	97.5%	12,842	119.9
ミーリングカッタ	21,267	91.9	10,845	101.5	11,145	105.3%	21,990	103.4%	11,657	107.5
ギヤカッタ	10,095	101.4	4,334	81.9	4,529	94.3%	8,863	87.8%	4,658	107.5
ブローチ	11,019	104.9	5,765	107.3	5,982	106.0%	11,748	106.6%	6,160	106.8
タップ・ダイス	35,410	104.0	14,556	79.5	14,712	86.0%	29,268	82.7%	16,185	111.2
リーマ	268	92.7	233	159.4	367	300.4%	600	223.6%	356	152.6
バイト	2,430	104.2	1,121	90.2	1,182	99.6%	2,303	94.8%	1,285	114.7
その他切削工具	348	64.6	170	94.6	163	96.6%	332	95.5%	175	103.2
合 計	104,392	98.1	47,736	88.7	50,339	99.5%	98,075	93.9%	53,318	111.7

(出典：日本工具工業会会員統計)

新編集委員自己紹介

久保田くみ子 (オーエスジー株式会社)

この度、Myツール編集委員を担当させて頂くことになりました、オーエスジー株式会社 久保田くみ子と申します。

会員の皆様に色々な情報をお届けし、また楽しんで頂けます様、微力ながら取り組んで参りたいと思います。

どうぞよろしくお願ひ申しあげます。



編集後記

iPhone6が先月発売となりました。2007年に初代が発売されて7年間で8代目となるようです。すなわち、一年で必ず新モデル(それも最近では世界中で数千万台売れる)を出してきたという計算になり、改めてiPhoneという製品の凄さを思い知らされます。

10月30日からJIMTOF2014が開催されます。2年毎に開催されるJIMTOFは、我々の業界が新製品を披露する一大イベントです。

今回も当工業会の出展会員さんの見所を集めた冊子を発行しますので、見学の一助にして下さい。

一世を風靡したミラクルエンドミルは、確か1990年のJIMTOFで初めて実演されたように記憶しています。画期的な新製品が発表されることを期待してJIMTOFを見学したいと思います。